語る kataru

藤原真理の世界

人間の声に一番近い楽器、チェロが注目されている。派手でも地味でもなく、あるときは朗々と歌い、あるときはぶつぶつとぼやく。テレビのCMに使われたチェロのCDはベストセラーになり、テレビドラマでは主人公が弾く。日本でチェロといえば、「セロ弾きのゴーシュ」を書いた宮沢賢治。没後六十五年の賢治祭、九月二十一日の命日に賢治が愛用した楽器を藤原真理さんが弾いた。聴いてみよう、チェロの真実と人生の本音を。

■最近、チェロが話題になっています。この楽器の魅力とは？

人間の声に近い音域で、（人間が）歌うときののどの使い方、そのまねがしやすい楽器です。よくいわれることですが、形や大きさも人間の女性のようです。とても人間くさい楽器なのです。飛行機に乗るときは一人分の座席を占めるので、別に切符を買わなければなりません。

私が持っているのは十七世紀末にイタリアのクレモナで作られたもので、人間でいえば三百歳になります。

■伝統的な邦楽では、チェロのような楽器はありませんね。

いつか平家琵琶を聴いて、チェロに近い音を感じたことがあります。文楽の、義太夫で使う三味線の太棹の響きもそれに近いと思います。

■黛敏郎に「文楽」という無伴奏チェロの作品があります。

あれを弾いていると、確かに太棹の響きを実感できます。私も以前は弾いていましたが、いくつかのコンサートで、主催者から（政治的な理由で）黛さんの作品はやめてくれといわれました。

それから弾いていませんけど、また弾いてみようと思っています。

賢治のチェロを手に、岩手県立花巻農高で／撮影・須長孝栄

■賢治祭では、賢治自身のチェロも使われたのですね。

私と賢治との出会いはやはり、「セロ弾きのゴーシュ」でした。小学校のときに読んだ童話の中に入っていたのです。賢治が持っていたチェロは、いまから七十年前の鈴木バイオリン製で、今回は何曲か弾いただけですが、とてもていねいな作りだという印象です。

ただ、エンドピン（チェロを立てるための胴の下にあるピン）がぐらぐらしていました。これを直して事前の調整に時間をかければ、コンサートに十分使えると思いますよ。

■賢治が作詞作曲した「星めぐりの歌」を弾いた感想を。

チェロは自分を映す鏡

人生、忙しくする暇ない

あれはよくできていますね。私は明るさというか明朗さというか、健康だから好きなのですよ。ほかのはかなり暗いのもあるじゃないですか。「精神歌」なんて、考えていくとちょっと鬱になってくる。

一見暗くない作品でも、物語全部を読み返していくと考えさせられて、キリがないんですけど、そういう意味で「星めぐりの歌」の明るさが好きですね。

■賢治の音楽については？

感覚が鋭い人だから、絵をかいても色使いがね、狂気すれすれといっていいようなところまでの、切り込みの鋭さを感じたことがあります。

そんな感覚の鋭さを音、音楽に対しても持っていた人だから——。オルガンやチェロだって独学だったから上手ではなく下手だったと思いますけど。だけど自然を見ても音楽を聴いても、何を目にしても耳にしても、そこからくみ取る才能はすさまじかったのじゃないかしら。

■大人になってからチェロを始めた賢治に対して、藤原さんは小さいときからチェロを。

父がチェロが好きだったので、生まれた子どもにはチェロを弾かせようと決めていたようです。私が弾き始めたのは幼稚園に上がる前の四、五歳のころですが、子ども用の楽器が来るまでビオラに足をつけて、チェロのように弾いていました。父も私といっしょにチェロを習ったのですよ。もっとも、すぐにやめてしまいましたが。

それから（桐朋学園の）斎藤秀雄先生の勧めがあり、一家で大阪から東京に移りました。

■斎藤秀雄さんのまな弟子だったのに、小沢征爾さんが指揮するサイトウ・キネン・オーケストラに参加していませんが。

オーケストラという部門も私たちは学生時代に授業の一つとして訓練を受けてきたけど、そういうのとプロのオーケストラとは大変な隔たりがあります。一つの独立した職業といっていいわけですから。それをふだんはソロを弾いたりしている人が集まって、お祭り的にする楽しさとか意義もあるでしょうけど、一年に一回集まって出来ることはオーケストラ本来の在り方から遠く、そういう趣旨には賛同できないのです。

それと、斎藤先生が偉大だったことは身にしみているし、先生のメソッドがあったから、いまチェロで生計を立てられているようなものなんですけど、それはまた別だと思うんですね。

小沢さんのリーダーシップの下にクラス会のように集まる、（サイトウ・キネンの）そういう活動の趣旨に百パーセント共感を持ち切れずに失礼しているのです。

■プロのチェロ演奏家になろうと思ったのは。

チャイコフスキー・コンクール（一九七八年）に入賞してからです。どこまで出来るかはともかく、プロのペースでやってみようと。それまで父は、チェロは趣味として、私を幼稚園の先生にしようと思っていたようです。

■物心がついてから、ずっとチェロとともに人生を——。

私にとって、チェロは自分を映す鏡のようになっています。心身の状態がわかるのです。

■チェロが不機嫌なときは？

時々あります。しかしチェロではなくて、弾いている自分が不機嫌だということに気がつくこともあります。

私は昼寝が趣味で、生活に心身の余裕を持ちたいと思っています。仕事先の楽屋でもパイプのいすを三つ並べたり、テーブルの上だったりしてでも寝られるのです。昼寝をすると、頭もリフレッシュしたような気になります。どんなコンサートに出るかということも含めて、私は人間はしたいことをするという信念を持っているんです。

■チェリストになったのも「したいことをした」のですね。そして来年は「天命を知る年」に？

私は天命を知るっていうんじゃなくて、今度、十年有効のパスポートを二回取ると、七十じゃないですか。

ああ、桜のお花見があと何回できるのかなというのと同じ感覚ですよ。だから人生は長いんだけど、二百年、三百年もつ楽器の生命なんかに比べると短いわけで、忙しくしている暇はないと思いますね。

忙しくしている暇がないからこそ、一つひとつ大事に仕事をしなければならないと思います。

■それは、どんな音楽家でありたいということなのでしょうか。

演奏家にとってはポンと出した音、その音自体がどのくらい魅力を持っているかということが、すごく大事なことだと思います。

クラシックの音楽を聴いたことがない、難しい音楽なんか何も知らない人が初めてチェロという楽器を聴いて、それが何らかの形で、その人の記憶に残るような音を出せる演奏家でありたいと思っています。

インタビュー・構成　横田　庄一郎（企画報道室）

ふじわら・まり　一九四九年生まれ。東京とパリを本拠に、国際的に活躍するチェリスト。桐朋学園で、「うるさく厳しい先生で、先入観が強かった」という斎藤秀雄に十五年間師事した。CDは数多く出ており、林光作曲の「セロ弾きのゴーシュ」など宮沢賢治ゆかりの曲も録音している。著書に「チェロ、こころの旋律」（大和書房）がある。

◇

賢治愛用の楽器で「星めぐりの歌」を演奏

九月二十一日には岩手県花巻市で開かれた賢治祭に参加した。賢治が愛用したチェロを使ったコンサートがあり、ピアニスト山洞智さんのオルガン伴奏で、賢治の「星めぐりの歌」やカタロニア民謡の「鳥の歌」などを弾いた。

このチェロは同市内にある宮沢賢治記念館に保存・展示されているが、この催しのために特別に貸し出された。

前日には、賢治が教師をしていた花巻農学校（現在の岩手県立花巻農業高校）の「賢治先生を偲ぶ会」でチェロ&トーク・コンサートが開かれた。初めてチェロという楽器を見て、聴いたという生徒が多かった。

同校の敷地には賢治が自耕自炊の生活をした羅須地人協会の建物が移築されており、ここでもチェロを演奏した。賢治がかつてチェロを弾いた同じ建物で、同じ楽器での演奏に、百数十人のファンが集まった。聴衆は芝生に座ったり、立ち見をしたり。演奏中に藤原さんの譜面台にトンボがとまって聴きほれ、鳥が鳴く〝伴奏〟もあった。ファンの一人は「実にまれな音楽会だった」と話していた。